

まんだら通信

第157号 (通巻189号)

平成21年(2009)07月 佛誕2575年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
http://www.shiunji.org/
Mail post@shiunji.org



私の行く先は？

「私はどこから来て、どこへ行くのだろ」と思ったことはありませんか。歳をとるに従って、行く末についての思いが強くなるようですね。人間はみんな、ずっと昔からそのことを考え続けてきました。偶々、去年の七月号でお大師さまのお歌、去年の七月号でお大師さまのお歌、阿字の子が、阿字の古里立ちいでて、また立ちかえる、阿字の古里を取り上げました。高野山を開創するという大事なときに、片腕ともいえる、甥であり、愛弟子でもある智泉大徳を亡くされたとき、悲しみの中で詠まれたお歌で「仏の世界か

ら生まれてきた智泉よ。この娑婆世界の修行を終えて、また母なる大日如来の懷に帰って行ったが、いつの日にか一緒に修行をしたいものだ」というお気持ちを表したものだと思えます。あなたも私も、それがガンであれ循環器系の病気であれ、老衰であれ必ず間違いなく死にます。そうであるならば、お預かりした大事な命を悔いなく使い「もういいよ。そろそろおいで」と仏様に言われたときに、素直に従うことのできる心の準備を整えておきたいものですね。

また逆に、運悪く見送る側になったとき「この子が大きくなるまで待つて欲しかった」、「やっとな年になって、これからの二人の人生だったのに」と悔やむことは出来るだけ早く卒業して心ならずも旅立たねばならなかった仏様の世界から、安心して見守ってもらえるような生活に、早くなるのが大事ではないでしょうか。

興福寺のお大師さま

二泊三日の休暇をもらって五月末、家内と二人で奈良と京都の総本山智積院をお参りしてきました。東大寺では御水取りの二月堂や大仏様、春日大社や若草山など半日がかりで歩き、鹿に餌をやって遊んできました。興福寺さんもお参りしましたが、有名な阿修羅像は東京にお出かけで留守。上の写真は、境内の護摩堂です。ほう、奈良仏教でもお護摩をするのかと思いつつ、薄暗いお堂に目を凝らしたところ、何とお大師さまがおいでになりました。お大師さまは、比叡山の伝教大師最澄さんと違って、奈良のお寺とは仲良くおつき合いらしたそうですが、それにしても宗派の違う法相宗の大本山に…。どんな謂れがあるのでしょうか。

『まんだら通信』と『あそか基金』に有り難うございました

『まんだら通信』に
市原・藤田幸子様 東京・宝里文子様
袖ヶ浦・小坂源治様 館山・伊藤武男様
千葉・龍崎政次様 館山・児玉重一様
横須賀・鈴木世津子様
館山・小塚大師様 館山・吉野政子様
館山・小形博子様 鋸南・妙典寺様
白浜・岩澤梅子様 『海の向こう』様
横浜・鈴木昇様 銚子・持宝院様
館山・島田啓子様 館山・島田敬子様
鴨川市・古泉院様 横浜・高山勝利様
『あそか基金』に
白浜・山口衣子様 白浜・和頼医院様
白浜・鈴木龍祐様 館山・関隆晴様
小千谷・成就院様 白浜・岩澤梅子様
白浜・吉田様
他に『まんだら通信』と『あそか基金』に、匿名希望の皆さまのご寄付を戴きました。

為すべきときにしなかつた不勉強は隠しようもなく、『まんだら通信』はいっとなつても心に響くようなことが書ける筈もなく、毎月恥を晒す始末で申し訳ないことです。

先月末、来日中のアンギラサさんが、帰国前のお忙しい中を一泊して行きました。

私からの分もチョコッと混ぜて、二十九万円をお渡ししました。お陰様で基金の額は百二十四万六千円と、漸く百万円を超えました。

この一日にお帰りにりましたが、奨学生はまた何人か増えることになるでしょう。有り難うございました。

余滴

◆数日、濃い海霧が立ちこめました。以前、こんなときは野島崎灯台の、腹の底に響くような霧笛が聞こえたものです。真偽はわかりませんが、お泊まりの観光客がうるさがるという理由で、鳴らさなくなったとか。若しそうなら、何とバカなことかと思えます。
◆去年、遂に行けなかったスリランカ。今年は何としても行きたいと思っています。
時期は11月下旬から12月初旬。飛行機代が一番安い時期であることと、あそか工芸の仕事も割合ゆとりがある時だからです。笑われるかと思いますが、何よりも今年は「後期高齢者」のお仲

間入り。
お陰様で具合の悪いところは、膝と胃が少々程度ですが、現在の体重46kgですから一年ごとに体力が…。
山の中のバドゥツラの、昔のフォスターチャイルドのご家族や、現在の奨学生たちにも可能な限り会いたいし。
もう一つ、スリランカの鉄道にいったん乗ってみたいとも。
所謂観光は、余り期待出来ませんが、行ってみようかなという奇特な方があれば、5人程度までなら大丈夫ですからご連絡下さい。
◆ワスレグサ(別名ヤブカン

ゾウ)【ゆり科ワスレグサ属】です。原色牧野植物大図鑑の説明に「若葉は食用になる。中国ではこの花を見て憂いを忘れるという故事があり、忘れるのに萱(かや)の字を宛てることから萱草」と、私には良く分からないことが書いてあります。
私は寧ろ一重のノカンゾウの方が好きですが、梅雨空の下の鮮やかなオレンジ色がとても印象的です。写真は、いつも通る農道の土手で写したのですが、畠の人がわざわざ刈り残してあって毎年株が増えていきます。09.06.09 龍渉



なつちゃん

えー、今日は、私が最近知り合いました、ひとりの若い看護師さんのお話をしましょうか。

山田奈津子さん。いま、金沢大学医薬保健学域四年生という美人女子大生です。女子大生で看護師という不思議に思われる方もいらっしゃるでしょうが、そのあたりが「なつちゃん」がみんなに愛されている所以でございます。

「なつちゃん」は、お母さんが元看護師だった関係もあって、小さな頃から看護師になることが夢でした。

そんな「なつちゃん」が高校生になったとき、小学校時代からの友だちがこんなことを話してくれたのです。

「なつちゃん、私ね、誰にも言っていないけど、生まれつきとっても難しい病気にかかっているんだって。なつちゃん、看護師さんになりたいって言ってたわよね。だったら、私が病気になったら、きつと、そばにいて。なつちゃんささそばにいてくれたら私、安心だから」

「うん、わかった。私、必ず、そばにいてあげるからね」

「なつちゃん」はそれから一生懸命勉強をして、短大を出て、看護師の国家試験に合格したとき、その友だちが東京の大病院に入院したことを知りました。

「なつちゃん」は迷わずその病院で看護師として働くことを選んだのです。

でも、新人の看護師が勝手に患者さんの担当を決めることはできません。担当の医師に「なつちゃん」は必死でお願いをしました。願いは叶いました。

「あつ、なつちゃん！ 本当に来てくれたんだ」

「うん、いっぱい勉強して、それからい

ろんな人にお願いで、やっとあなたの担当看護師になれた。もう、大丈夫。ずつと、そばにいてあげるからね。がんばってね」

「ありがと……なつちゃん」

ふたりの目は、涙の湖になり、いまにもあふれそうでした。

その子は病気が怖くて、自分の病気から目をそむけようとしていました。

さまざまな感染症も彼女を襲いました。そのたびに「なつちゃん」は医師との間に入り、一生懸命働いたのです。難病の治療には、大変なお金がかかります。無駄を少しでもなくすため、「なつちゃん」は、彼女の住んでいたマンションの解約から、私生活のあらゆることまで手伝ってあげました。

そして、最終的には身体的にも経済的にも実家で安静に暮らすことが一番だと判断し、嫌がる彼女を何度も説得し、ようやく実家に帰したのでした。

その後も「なつちゃん」は、集中治療室（ICU）勤務を希望し、救急医療の現場で働きました。そんなとき、今度は親戚のおばさんがクモ膜下出血で運び込まれてきました。

でも、自分は別の救急患者についていなければなりません。

なぜ、自分の身内の看護ができないのか。悩んだあげく、一歯車としての看護師ではなく、自由が効くもう一段上の専門看護師になるべく、「なつちゃん」は大学へ編入したのでした。

その間、早いもので五年の月日が流れていました。学費は看護師のアルバイトをしながらなんとかやりくりできました。そして、いま、大学四年生。三十歳に

なった「なつちゃん」は、今度は大学院をめざしています。

そんなある日のこと、アルバイト先の病院で末期の患者さんと出会いました。その人は、回復の望みが薄れたことを知ると、何も食べなくなり、生きる気力を失っていました。医師だけでなく、家族も完全にあきらめきっていました。病室は静まりかえっています。

「なつちゃん」は、いつものように子どものように目を輝かせ、白い制服姿で、その患者さんのベッドに近寄りました。

「こんにちは。山田です。今日はいい天気ですね。こういう日は外で遊びたいなあ。おばあちゃんは、子どものとき、どんな遊びをしたの？」

すると、どうでしょう。それまで失意のどん底にいて、まったく話をしなかつたおばあちゃんが、突然、相好を崩し、自分の子ども時代の話を始めたのです。

「ゴム跳び……まりつき……花いちもんめ……」

「おばあちゃんがしゃべった」

周りの人たちは、みんな驚きました。おばあちゃんの目も遠い昔を思い出すように、やさしい眼差しに変わっていきました。娘さんは泣いています。孫たちがベッドに近寄って「おばあちゃん！」と声をあげて抱きつきました。

なつちゃんはその理由が分かっていたました。

人間はどんなときでも、ひとと話したい動物なのだ、と。たとえ声が出なくなっても、命が尽きるまで「この人なら、私の話を聞いてくれる」と話し相手を本能的に探しているということを、これまでの看護師生活で知っていたのです。だから「なつちゃん」はどんな患者さんになっても、これまで笑顔絶やすことな

く話しかけてきました。そして、いつも「聞く」姿勢で接するのです。

これは決して「なつちゃん」だけが特別な能力を持っているわけではありませ

ん、病室を訪れる誰でも、その能力は持っている、と「なつちゃん」は言います。

病院だけではありませんね、地域でひとり暮らしをしているお年寄りに、学校でいじめにあっている子に、引きこもりの若者に、「何でも好きなことを話してみ、聞かせて」という気持ちで接すれば、奇跡は起こるというのが、「なつちゃん」の説でした。

体を診るのが医師なら、心を聞くのが看護師、保健師やヘルパー、ボランティアの大事な仕事。

「おばあちゃん、子どもの頃、運動会の駆けっこ、速かったでしょう？」

「うん、速かったよ」

「そうなんだあ。ちょっとおてんば娘だったんだね」

「なつちゃん」は今日も看護をしながら、多くの人から話を聞かせてもらっています。